

カトリックに改宗したローマのユダヤ人指導者の自叙伝、初めてのイタリア語訳出版。

1939年から1945年までローマのユダヤ人共同体の指導教師を務めたイスラエル・ツォッリは、そのカトリック改宗が主な原因となって数十年にわたる沈黙と無理解を受けた後も、議論的になりつづけている。今回サン・パオロ出版社は、ツォッリの自叙伝”Prima dell'alba”（夜明け前）の翻訳を出版し、半世紀に及ぶ空白を埋めた。と言うのは、この書は1954年に合衆国で出版された後、イタリアでは一度も出版されなかったからである。

この目新しさの他に、この出版の特徴は、オリジナルのイタリア語の手稿を元に行っている点だ。と言うのは、長い間、この書は英語で書かれたと考えられていたからである。出版社は、遺族との合意の上で、英語版に導入された内容と順番の修正を、その修正の動機を説明する資料が存在しないという理由で、カットして、オリジナルにまったく手を加えずに刊行することにした。

ツォッリが66歳のときに執筆されたこの自伝を読むと、彼の改宗は何年間も聖書を深く読みつづけることと神秘的な体験によって徐々に熟してきた決心であったということがわかる。彼は1945年2月13日、洗礼を受け、ピオ12世の名前であるエウジェニオの名前を霊名にした。しかし、ツォッリははっきりと、自分が洗礼を受けたのは、第二次大戦中にピオ12世がユダヤ人を救おうと努力したことに対するお礼としてではないと言い切る。ただし、「こう言うことは、教皇の努力を認めないという意味ではない」と念を押している。

事実、ツォッリは多くの紙面を割いて、教会とピオ12世が迫害される者たちのためにした仕事について語っている。第一人者の目撃証言であるこの証言は、現在多くの議論を呼び起こしている歴史的問題に光をあてる。と言うのは、彼が執筆した時点、1954年では、まだピオ12世の「沈黙」についての論争は起こっておらず、教皇を弁護する必要はなかったからだ。

自伝には、ツォッリがローマのユダヤ人共同体の責任者たち（そのうちの何人かは戦闘的ファシストであった）に、文書を隠滅し、間近に迫った迫害から身を守るため手段を講じるように必死に納得しようとしたことについて多くの証拠と証言を載せている。ナチの迫害はすぐに開始され、ローマの1000人以上のユダヤ人が強制収容所に送られた。

(1) Eugenio Zolli, *Prima dell'alba*, Autobiografia autorizzata, Edizioni San Paolo, Cinisella Balsamo (Miano), 2004, 284 pags., 16 eur.